

戦前の英語教科書における英詩の扱い方の特徴・工夫

本田 雅宣

はじめに

近年、実用的な英語力を求める世論のもと、教科書では実用的な説明文ばかりが用いられ、文学作品、とりわけ詩は、ほとんど用いられていない。一方で、齋藤(2010)・南(1991)・脇本(2015)が指摘するように、戦前の英語教科書では、今よりも英詩が多く使用されている。本研究では、日本人によって編纂された英語教科書として有名な、*Globe Readers* と *Crown Readers* における英詩の扱い方の特徴や工夫を分析し、教科書で英詩を使用する意義に関して考察する。

本研究で分析する教科書について

本研究で分析する *Globe Readers* と *Crown Readers* について、小篠・江利川(2004)では次のようなことが紹介されている。

- ・ *Globe Readers* は、岡倉由三郎が、自己の理想を実現するべく編集した教科書である。文学的な物語や、岡倉の言う「風物教授」に適した多彩な読み物が収録されている。
- ・ *Crown Readers* は、大正末期にもっとも広く使用されたリーダーである。神田乃武の名で出版されているが実際の執筆者は長岡擴である。長岡擴はイギリスに留学しており、内容がイギリスに偏っている。第4巻の約7割が文学的内容である。

以上のように、*Globe Readers* と *Crown Readers* はどちらも、当時の英語教育の第一人者たちによって編集された、英語圏の風物や文学・教養を重視した教科書であるといえる。

Globe Readers と *Crown Readers* における英詩の扱い方の特徴・工夫

日本人によって編纂された英語教科書として有名な、*Globe Readers* と *Crown Readers* における英詩の扱い方の特徴や工夫を分析し、次の①～④のような点が確認された。

①英詩がメインの正課の数が、正課全体の10%～20%

表1に示したように、*Globe Readers* と *Crown Readers* では、正課の数のうち10%～20%が、英詩がメインの正課となっている。10%～20%という割合は、1冊の本全体の中では少ない量である一方で、石川(1997)で指摘されている現代の高校英語教科書における英詩の量と比べると、大幅に多いといえる。この割合は、日本人の編集者が、英語を外国語として学ぶ日本人学習者にとって無理のない量を考慮し、工夫した結果であると考えられる。また、*Globe Readers* においては、詩が正課として使用されているのは第4,5巻のみであり、第1,2,3巻では詩は付録の中に収録されている。これは、岡倉(1911)で述べられているように、詩は初級の段階の学習者にはあまり適さないという岡倉の考えを反映したものであると考えられる。

表1 教科書ごとの英詩がメインの正課の割合

教科書名	<i>Globe Readers</i> 4	<i>Globe Readers</i> 5	<i>Crown Readers</i> 1	<i>Crown Readers</i> 2	<i>Crown Readers</i> 3	<i>Crown Readers</i> 4	<i>Crown Readers</i> 5
英詩がメインの正課の数	7	7	5	5	6	6	5
正課の総数	38	40	45	50	40	45	37
英詩がメインの正課の割合	18.4%	17.5%	11.1%	10.0%	15.0%	13.3%	13.5%

②内容的な相互関連のある英詩と散文の使用

Globe Readers と *Crown Readers* の両方において、完全に単独で英詩を配置するのではなく、散文部分と関連のある英詩を使用するという工夫が見られた。*Globe Readers* の第4巻では、7個ある詩がメインの正課のうち、6個でその課の付近の散文との内容的関連が見られた。(表2) このようにすると、学習者は詩の読解に取り組みやすくなると考えられる。

表2 *Globe Readers 4* における英詩と散文部分との関連性

Lesson	英詩のタイトル (作者名)	英詩の内容	散文部分との関連性
2	Home, Sweet Home (Payne)	お家が一番。お家みたいに良い場所は他にない。	直前の Lesson 1 では、イギリス人が現在の国土に住むことになった歴史が説明されており、自分が住むところという話題が共通している。
9	Onward! Onward! (Hagan)	常に努力し続けることが重要。	前後の散文部分との関連性なし。
16	The windmill (Longfellow)	風車が擬人化され、風車の視点で自身の日常が語られる。	<i>Globe Readers 4</i> 全体が、イギリスやヨーロッパ圏の風物に関連した話題が多く、それとの一貫性がある。
23	My mother (Ann Taylor)	母親が子供にやってくれたことが列挙され、母への感謝と恩返しをすべきであることが述べられる。	直前の Lesson 22 は、スコットランドのとある民家の母親が、追われる国王を家に匿うという話であり、母の偉大さを述べているという点で一貫している。
29	The choice of trades (作者不明)	男の子たちが、それぞれ将来どのような職業につきたいかを述べ、偉大なことを成し遂げると宣言する。	直前の Lesson 28 では、イギリスの街の様子を紹介する文章の中で、様々な職業の人々が登場する。
33	The wandering boy (Henry K. White)	冬の寒い中を、孤児の少年がさまよいつつ、自身の絶望的な状況を語る。	直前の Lesson 31, 32 では、1666年のロンドンの大火で、多くの建物が焼け、犠牲者が出たことが紹介されており、家や家族を失った人々との連想関係があるといえる。
38	The soldier's dream (Thomas Campbell)	戦場で夜を明かす兵士が、家族のもとに戻る夢を見るが、夜明けとともに現実の世界に引き戻されてしまう。	この章の前に戦争に関する章が3つあり、戦争というテーマが一貫している。

③数行程度の短い英詩を課の終わりに配置

Crown Readers においては、正課のメインの読み物ではなくても、数行程度の短い英詩が最後に配置されている課が複数存在した。詩以外にも、詩的な表現を含む諺や格言が最後に載せてある課も複数存在した。これにより、無理なくコンスタントに英詩に触れることとなり、学習者は英詩に慣れることができると考えられる。

④詩的な特徴をもつ例文の使用

中学1年段階に相当すると考えられる、*Globe Readers 1* と *Crown Readers 1* では、作品としての詩ではないものの、似た音の単語や似た形の文を繰り返し用いるなど、詩的な要素を含む本文が複数箇所に見られた。これにより、学習者は、自然と英詩的なリズムを体得し、英詩を読む準備ができると考えられる。

また、*Globe Readers* では、詩的な特徴（レイアウト・似た音の繰り返し）をもつ文法の例文が複数確認された。これによって学習者は、文法を覚えるために詩的な要素をもつ例文を暗記しようとし、より効果的に詩を読むための準備がなされる可能性がある。

以上のように、戦前の英語教科書として有名な *Globe Readers* と *Crown Readers* には、学習者を英詩に親しませるための様々な工夫が施されており、教科書の編者たちが英詩の重要性を理解し、学習者に英詩を学んでもらおうとする意識があったことがうかがえる。

英語教科書で英詩を使用する意義

岡倉(1911)と長岡(1928)から分かるように、*Globe Readers* と *Crown Readers* を編集した岡倉と長岡はともに、英語教育の目的に関して、実用的目的と教育・教養的目的があると考えている。そのような二人が編集した教科書に英詩が一定の割合で組み込まれているのは、主に教育・教養的目的を追求するためであったと思われる。また、英詩がさらに多く用いられているアメリカやイギリスの教科書の模倣という側面もあった可能性がある。

斎藤(2001)がまとめているように、英語には、英語それ自体の文法・単語・音を用いた様々な言語表現が存在する。詩を授業で用いることで、単なるツールとしてではなく、アートとしての言葉の側面への気づきを促すことができると思われる。

現代の英語教育はコミュニケーションを重視した流れとなっているが、高等学校学習指導要領(平成30年告示)の第8節外国語の第1款の目標では、「外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの理解を深める」や「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮」などの目標が掲げられている。英詩の学習は、これらの目標に資するものである可能性がある。

石川(1997)が示しているように、現代の英語教科書では、英詩はほとんど用いられていない。一方で、戦前の英語教科書のような形で、英詩を現代の教科書の中で再び使用することは、現状の内容や量に大幅な変更を強いる必要はないことを考えると、十分に可能であると思われる。

結論とまとめ

本研究では、日本人によって編纂された戦前の英語教科書として有名な *Globe Readers* と *Crown Readers* における英詩の扱い方の特徴や工夫を分析した。その結果、①英詩がメインの正課の数が正課全体の10%~20%となっていること、②内容的に相互関連のある英詩と散文が使用されていること、③数行の短い英詩が課の終わりに配置されていること、④詩以外にも詩的な特徴をもつ文が使用されていること、などが確認された。また、教科書で英詩を使用する意義について考察した。現状では、英詩を学習する意義への理解や英詩を扱った教科書が不足しているため、授業実践やカリキュラム開発がなされにくい状態にあると思われる。英詩を用いた教科書や授業に関して、さらなる研究が必要であると考えられる。

参考文献

- 石川慎一郎(1997)「英語教育における英詩教材—高校英語科教科書に見る英詩の採録状況とその教材的価値の再考—」『言語文化学会論集』9:123-135.
- 岡倉由三郎(1911)『英語教育』博文館
- 小篠敏明、江利川春雄(2004)『英語教科書の歴史的研究』辞游社
- 齋藤晴恵(2010)「英語教科書が英詩受容に果たした役割—明治期の輸入英語教科書と英語教科書を中心に—」『図書館情報メディア研究』8(1):29-43.
- 斎藤兆史(2001)『英語の味わい方』日本放送出版協会
- 高梨健吉、出来成訓(1993)『英語教科書名著選集 第13巻-第14巻 *The Globe Readers* [岡倉由三郎著]』大空社
- 高梨健吉、出来成訓(1993)『英語教科書名著選集 第19巻-第20巻 *Kanda's Crown Readers* [神田乃武著]』大空社
- 長岡擴(1928)「中学校の英語科」『英語青年』60(2):43.
- 南精一(1991)「英語教科書に現れた英詩について-明治・大正期を中心として-」『日本英語教育史研究』6:185-202.
- 文部科学省(2018)「高等学校学習指導要領(平成30年告示)」
- 脇本恭子(2015)「英語教科書の歴史に辿る教材としての英詩—有海(1938)再考—」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』160:39-50.